

笈岳より

笈岳登山は多年の私の念願であった。しかしこの山には道がない。藪がひどいから残雪の頃を見計らって登るほかない。その残雪も少し時期が早いと深くもぐるし、少しおけると雪の消えた所に厄介な藪が出てくる。ちょうどいい時分というのはわずかである。毎年、今年こそはと思いつきながら時期を失ってしまう。それに山に明るい人の案内がいるし、雪上にテントを張って一晩過ごさねばならない。あれやこれや考えると、なかなか一筋縄ではいかぬ山である。しかしその念願をとうとう果たした。

一九六八年五月十日。苦しさは初めから覚悟していた。私たちの今いる小屋の標高は約六百メートル、目ざす笈岳の頂上は一八四一メートル、途中若干の上り下りがある。それを計算にいれて、一日千五百メートルの登りはもう私には辛い。おまけにちゃんとした登山道があるわけではない。上の方はずっと残雪を踏んで行かねばなるまい。

私たちというのは老童三人、いずれも六十代の半ばに達している。気は若い、足腰も若いとは言えない。こんな道のない山へ三人だけで登るのは無理である。そこで日本山岳会石川支部の若い元気な青年二人に助力を求めた。そのほかに地元の二人に、今夜の泊まり場までテント食糧を運んでもらうことにした。

手廻りの品だけを担いだ軽装で、早朝五時小屋を出発した。小屋とは、尾添川（末は手取川と合して日本海に注ぐ）上流の中宮温泉のすぐ手前にある簡素な二階建である。温泉はまだ開いていなかった。初めしばらく川原沿いに歩いて行くと、人のあまり行かない山でよく出くわす籠渡しへ出た。対岸に針金が張ってあって、籠の代わりに一人分の座席の板が吊ってある。それに乗ると、その板につけられた綱を引っぱってもらって、向こう岸に渡る仕掛けである。私たちは全部で七人、一人ずつ渡るのでから暇がかかる。

「広報 かが 5月第92号平成25年」 より

深田久弥 山の文化館

◆パチワーク展示会

10年の歩み～みゆきと仲間たち～ ※入場無料

平成25年 8日(水)～12日(日) 10時～16時30分 (最終日は16時まで)

◆間こう会「追憶の笈ヶ岳おいぶがだけ (深田久弥氏との山行)」 ※聴講無料

26日(日) 13時30分～15時

講師：中川博人なかがわ ひろとさん (日本山岳会石川支部長、笈ヶ岳同行者)



笈ヶ岳山頂にて▶

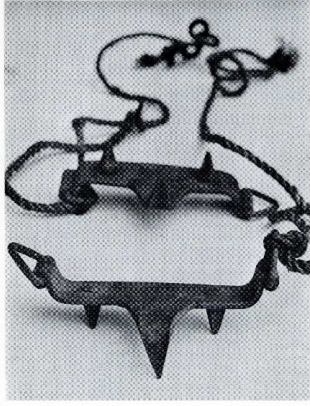
●住所：大聖寺番場町18-2 ☎72-3313 ●開館：9時～17時(入館は16時30分まで)

●休館日：火曜日(祝日は開館) ●入館料：一般300円 75歳以上150円

トップ・リーダーは谷端同村長の名前から「正宗」と命名された。

―初代の正宗は、大げさに言う普通のサルの一多半ほどのからだ。色つやの良いふさふさした毛をし、手足が長うて、なかなか貫録があった。人工食になってから、大きなサルは見れんようになった。四十二年の朝、正宗がけがをして左足の皮がたれている。ボス争いに負けたらしく、雄のナンバー2（サブ・リーダー）とナンバー3が、群れの中に入れさせん。

それで午後には正宗の姿が見えんようになって、翌日、オハナⅡ テレビドラマ「おはなはん」から命名Ⅱが子ザルを連れていなくな



吹きさらしで固くいてついた尾根すじを歩くのに用いた金カンジキアイゼンに似ているが、本場のヨーロッパ・アルプスの人たちも白山ろくの人たちも考えたことは同じだった

った。オハナは正宗といつもいっしの雌ザル。グラマーで目じりの下がったきれいなサルやった。きつと正宗といっしょに駆け落ちしたんだと思っっている―

正宗「夫婦」の駆け落ちには後日談がある。四十五年五月、糸田さんや西村さんが作家の故深田久弥さんと笈岳登山をしたときのこと。シリタカ谷の尾根でブナの木に登っているオハナに再会したという。「正宗と子ザルは見あたらなかったがオハナに間違いはない」と糸田さんは強調している。